

立山町文化財調査報告書 第20冊

古屋敷 IV 遺跡

—発掘調査報告—

1994年

立山町教育委員会

序

文化財は、祖先の営みを私達に伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく現在の文化を理解するためにも重要なものです。なかでも、埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鍵であると言えましょう。

このたび調査の行われた古屋敷Ⅳ遺跡は、古屋敷段丘上に散在する遺跡群の一つであり、かつて縄文時代中期の住居跡が多数検出された古屋敷Ⅰ遺跡などと共に、まとまった地域社会を形成していたと考えられている遺跡です。

今回の調査を行った地区は、これまで遺跡の範囲外とされていた場所ですが、住居跡や穴などが検出され、縄文時代における古屋敷段丘の時期別・用途別の使い分けなどを考えるうえでの貴重な資料を得ることができました。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化的理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際して御援助していただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査に御協力いただいた富山県立山博物館と地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

1994年3月

立山町教育委員会

教育長 金川 正盛

例　　言

1. 本書は、富山県立山博物館の野外施設建設に先立つ、富山県中新川郡立山町古屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、富山県立山博物館の委託を受け、立山町教育委員会が実施した。
3. 現地調査及び報告書作成は平成5年5月10日～平成6年3月31日の期間に行った。発掘面積は約1,500m²である。
4. 調査事務局は立山町教育委員会に置き、社会教育課係長佐伯外宣・同主事三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長開上寛が総括した。
5. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典と同学芸員瀬戸智子である。
6. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示を得た。また、調査から報告書作成に至るまで、下記の方々から御協力を得た。記して謝意を表します。

山本正敏・酒井重洋・久々忠義（以上富山県埋蔵文化財センター）、上市町教育委員会主任高慶孝、地元芦原寺地区
7. 遺物の注記は「T F Y IV」とし、次にグリッド名・層位・日付の順に付した。
8. 遺物整理・実測・製図は、三鍋・瀬戸が中心となり、高橋浩二（富山大学大学院生）、大野淳也・柳原滋高・中村大介・野川裕二・長谷川幸志・大知正枝・島崎久恵・大泰司統・大高政史・尾野寺克実・河合忍・武田昌明・鶴松晋・松原和也・大平愛子・野中由希子・福海貴子（富山大学学生）が協力した。
9. 本書の編集・執筆は、三鍋・瀬戸が担当した。執筆分担は各文末に記した。

目 次

I 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
II 調査に至る経緯	2
III 調査概要	2
1. 立地と層序	2
2. 遺構	2
3. 遺物	5
(1) 土器	5
(2) 石器	9
IV 調査成果	14
参考文献	15
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図 地形と区割図	3
第3図 調査区遺構全体図	折込み
第4図 遺物実測図	6
第5図 遺物実測図	7
第6図 遺物実測図	8
第7図 遺物実測図	9
第8図 遺物実測図	10
第9図 遺物実測図	11
第10図 遺物実測図	12
第11図 遺物実測図	13

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、東北約21km、面積は308km²である。

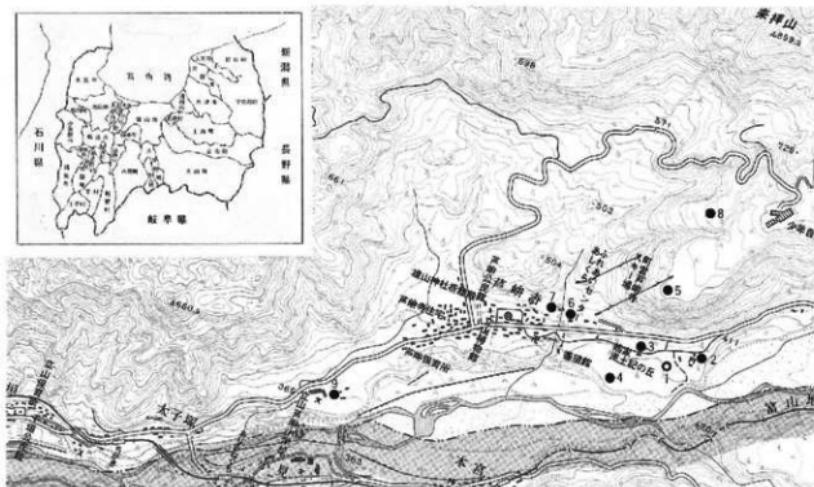
地勢は、三角州や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。

今回調査した古屋敷Ⅳ遺跡は、芦嶋寺集落の東方約1.1km、常願寺川中流右岸の段丘上、標高約400mの地点に所在する。この段丘は、中位段丘と低位段丘の中間に形成されたとみられているもので、古屋敷段丘と通称している。段丘面の縁辺部は段丘崖となっており、常願寺川の現在の河床との比高は約50mである。

北側には、不動平溶岩台地がせまり、その背後に米沢山が連なっている。常願寺川の上流方向にあたる東側には、弥陀ヶ原溶岩台地がせまり、その遠方に立山連峰が望まれる。

周辺には、縄文時代から近世にまで至る多数の遺跡が存在するが、とくに姥堂川東岸の段丘上から不動平溶岩台地上にかけては縄文時代遺跡が密集している。

これらの遺跡の中で古屋敷Ⅳ遺跡に関連があるものとしては、中位段丘上には野口（縄文時代前～中期）、不動平B地点（縄文時代中～後期）の各遺跡が、一段低い古屋敷段丘上には古屋敷I（縄文時代中～後期）・古屋敷II（縄文時代）・古屋敷III（縄文時代中～後期）の各遺跡が、さらに不動平溶岩台地の先端部から西側斜面にかけては不動平A地点（縄文時代中～後期）がある。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡
(S=1/25000)

- 1.古屋敷Ⅳ遺跡
- 2.古屋敷I遺跡
- 3.古屋敷II遺跡
- 4.古屋敷III遺跡
- 5.不動平遺跡A地点
- 6.不動平遺跡B地点
- 7.野口遺跡
- 8.芦嶋寺城跡
- 9.門の本削遺跡

II 調査に至る経緯

古屋敷跡遺跡が立地する河岸段丘上は、かつてはトチ・ブナを主体とする落葉広葉樹林であったと考えられている。明治以降、杉の植林と開墾が進められた結果、段丘平坦部は水田と畠地が大部分を占め、段丘崖などの斜面は杉林となり、ごく一部に雜木林が原生林を残している。

平成4年、富山県立山博物館より富山県埋蔵文化財センターに、野外施設の建設計画に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての照会があり、立山町教育委員会ではこれを受けて11月12日～13日の間、開発計画地内の試掘調査を実施した。その結果、計画地内が埋蔵文化財包蔵地であることが判明し、ここを古屋敷跡とした。この埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて立山博物館と立山町教育委員会の間で協議を行った結果、平成5年度に古屋敷跡の発掘調査を実施することとなった。

(三編)

III 調査概要

1 立地と層序 (第2・3図)

古屋敷跡は、芦嶺寺集落の東方1.1km、立山町芦嶺寺字古屋敷に所在する。一帯は、常願寺川によって形成された河岸段丘上にあたり、北側と東側には立山火山の噴火によって形成された溶岩台地がせまっている。

遺跡は、段丘が南側常願寺川方向に張り出して幅が最も広くなった部分の中央東寄りに、古屋敷跡の西に隣接して所在する。ここは、この段丘面では最も高い部分にあたり、標高は約400mを測る。調査対象地区の北側には、東から西に向かって幅約10mの小支谷が入り込み、遺跡はこの小支谷に面して立地する。なお、この小支谷は、古屋敷段丘のほぼ中央を北東から南西に向かって流れており、段丘上に存在する遺跡群は全てこれに面して立地している。

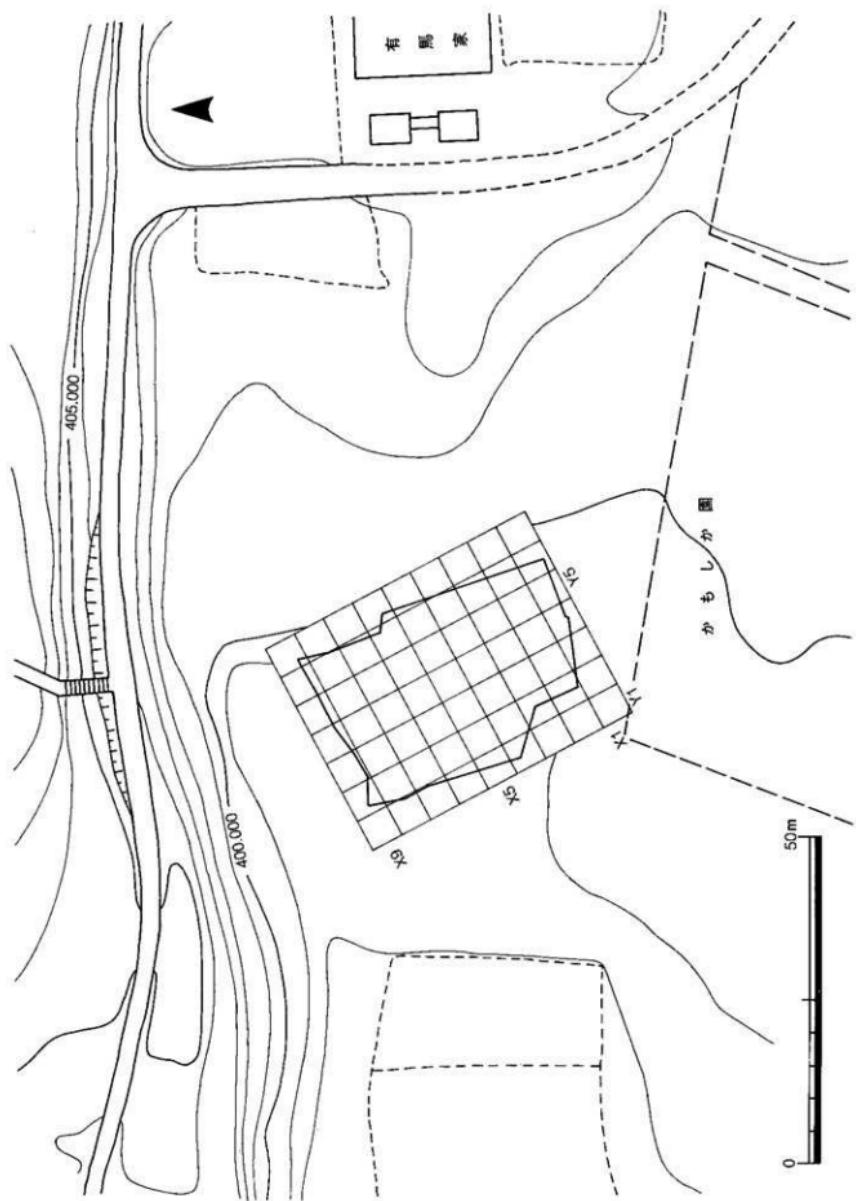
調査区は、北東から南西に向かってなだらかに傾斜する。遺構面は裸岩のなかに黄褐色粘質土が南東から北西方向に約5～10mの幅で貫入している。層序は、第1層・耕作土、第2層・暗茶褐色土、第3層・黒褐色土、第4層・黄褐色粘質土(地山)となっており、第2～3層が遺物包含層である。遺物包含層は、西側ではやや厚く、東側では薄めに堆積している。

2 遺構 (第3図)

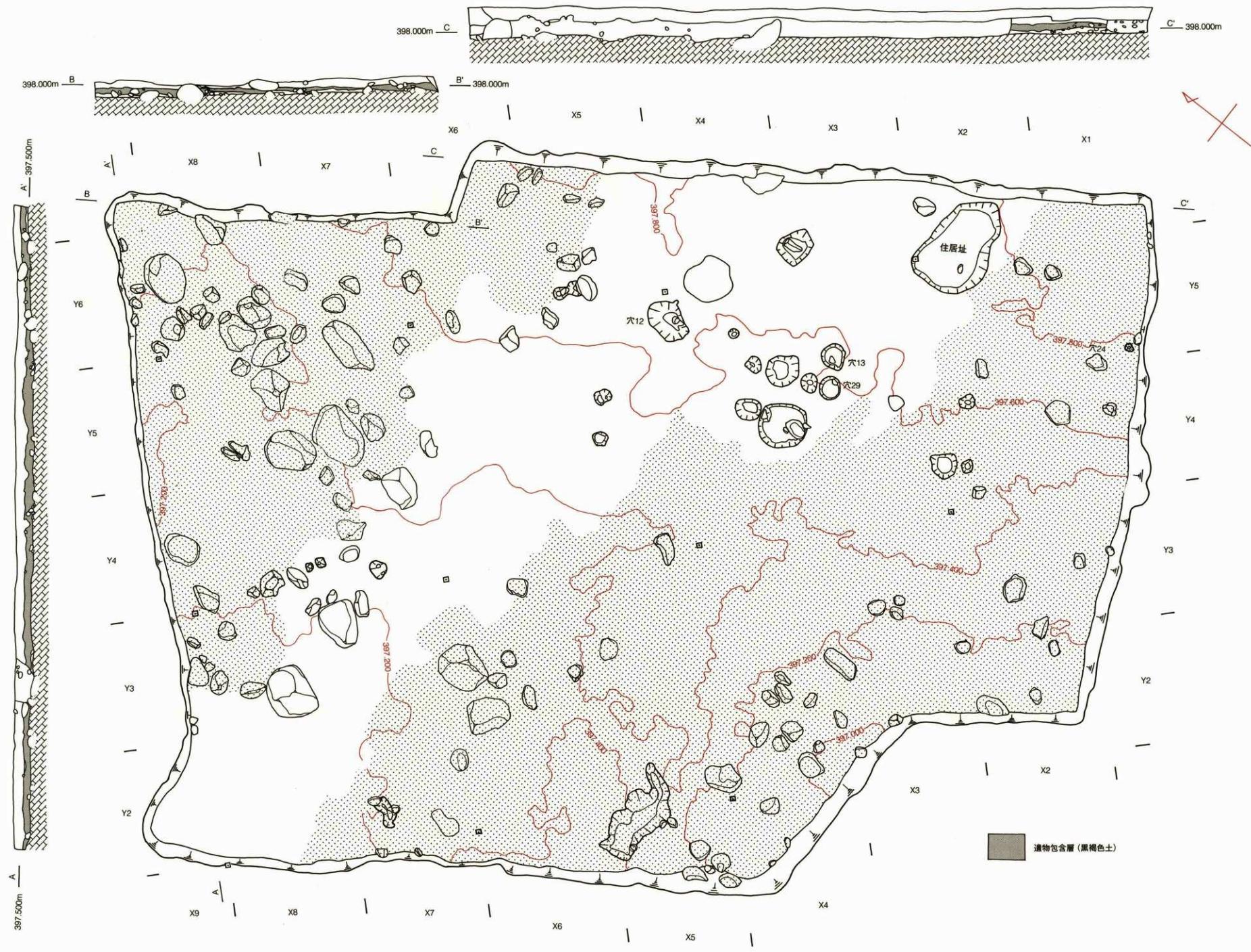
住居跡 (第3図) 検出した住居跡は、わずか一棟である。標高は約398mで、X2・Y5に位置する。当初、長軸約6m、短軸約2.5mの不整規形プランを検出したが、土層断面から、北西部約2mの範囲は擾乱と判明し、東側部分も擾乱を受けた可能性が考えられた。このため最終的には、長軸約4m、短軸約2.6mの規則形プランとなった。主軸はN-90°-Wの方位をとる。覆土は黒褐色土が主体をなす。壁は、西側の壁高が20～30cmと高く、立ち上がりもしっかりしているが、東側は10～15cmと低く、立ち上がりもある。

床面は、全体的に西側に向かってゆるく傾斜している。後世の擾乱によるものか、全面的に遺存状態がかなり悪く、柱跡・柱穴等は確認できなかった。覆土内から遺物は出土していない。

穴 (第3図) 検出した穴は34個であったが、それらのうち3分の1は開墾の際に岩を取り除いた痕であることが後日判明したため、最終的に23個となった。



第2図 地形と区割図



第3図 調査区全体図 (S=1/100)

遺物の出土した穴は5個で、炭化物の出土した穴は2個である。遺物の出土した穴は、X 1～5・Y 2～5区あたりに集中している。

穴3は、X 2・Y 5に位置し、長軸約1.8m、短軸約1mの楕円形で、深さ約20cmの浅い皿状を呈する。覆土は礫混り黒褐色土の単層で、縄文土器が出土している。調査中に消滅した。

穴12は、X 4～5・Y 5に位置し、長軸約1.8m、短軸約1.2mの楕円形で、深さ約45cmのロウト状を呈する。覆土は黒褐色土の単層で、縄文土器が出土している。

穴13は、X 3・Y 5に位置し、直径約1mの円形で、深さ約20cmの円筒状を呈する。覆土は黄色粘質土混り黒褐色土の単層で、覆土に炭化物が混入している。

穴24は、X 1・Y 5に位置し、直径約50cmの円形で、深さ約10cmの皿状を呈する。覆土は黒褐色土の単層で、縄文土器が出土している。

穴29は、X 3・Y 4～5に位置し、直径約1mの円形で、深さ約20cmの円筒状を呈する。覆土は黄色粘質土混り黒褐色土の単層で、覆土に炭化物が混入しており、縄文土器が出土している。
(瀬戸)

3 遺物（第4～11図）

今回の調査では、ほとんどの遺物が包含層から出土しており、遺構から良好な状態で検出し得たものはごく少ない。また、全器形を復元できたものは無い。

(1) 土器（第4～9図）

出土した土器は、珠洲焼1点と近世陶磁器6点を除き、すべて縄文時代に属するものである。

a. 縄文時代の遺物

前期（第4図1・2）

1は縦条体の押圧により施文された胴部で、朝日下層式に比定できる。2はC字型爪形文を2条1単位にして施文しており、北白川下層式に比定できる。

後期（第4図3～第6図）

6・7三角形連続刺突文により施文されており、気屋式に比定できる。

4・8～15は、沈線文・摩消縄文等により施文される一群である。14は内外面ともに多量の煤が付着し、8は外面に、11は内面にやはり多量の煤が付着している。15は浅鉢で内外面ともに良く磨かれている。

16は、胴部が算盤状を呈する注口土器で、頸部を巡る平行沈線周には連続刺みののち連続刺突がなされ、胴部には沈線による区画文が施され、区画文の間は磨消しにより施文される。なお、胴部の沈線の中にも所々連続刺突がなされている。真脇遺跡に類例が見られ、井口式に比定できる。

3・5は、平行沈線文により施文されており、3は表面に赤彩の痕跡が残る。晩期に属する可能性もある。

17は直径約20cmの深鉢口縁部で、縄文地文の上に2条の浅い沈線を施す。表面には多量の煤が付着している。

18は深鉢口縁部で、穂い波状を呈する可能性がある。口縁部には幅広い磨消しによる無文帯が巡り、焼成後に穿孔している。

19は直径約30cmの深鉢口縁部で、縄文地文の上から、口縁と平行に指撫でによる2条の浅い沈線を施す。

20は直径約31cmの深鉢口縁部で、縄文地文の上から、口縁と平行に指撫でによる浅い沈線を施す。表面には多量の煤が付着している。

21は直径約16cmの深鉢口縁部で、内外面ともに良く磨かれている。

22は直径約22cmの深鉢口縁部で、外面は良く磨かれ、口縁内面は肥厚させている。

23は直径約22cmの深鉢口縁部で、貝殻腹縁による条痕が施される。胎土には纖維が多く含んでおり、前期に属する可能性もある。

24は直径約26cmの深鉢口縁部で、口縁部無文帯の下を沈線が巡る。表面には赤彩の痕跡が残る。

25は、磨消しによる口縁部無文帯に沈線により施文される。表面には煤が付着している。

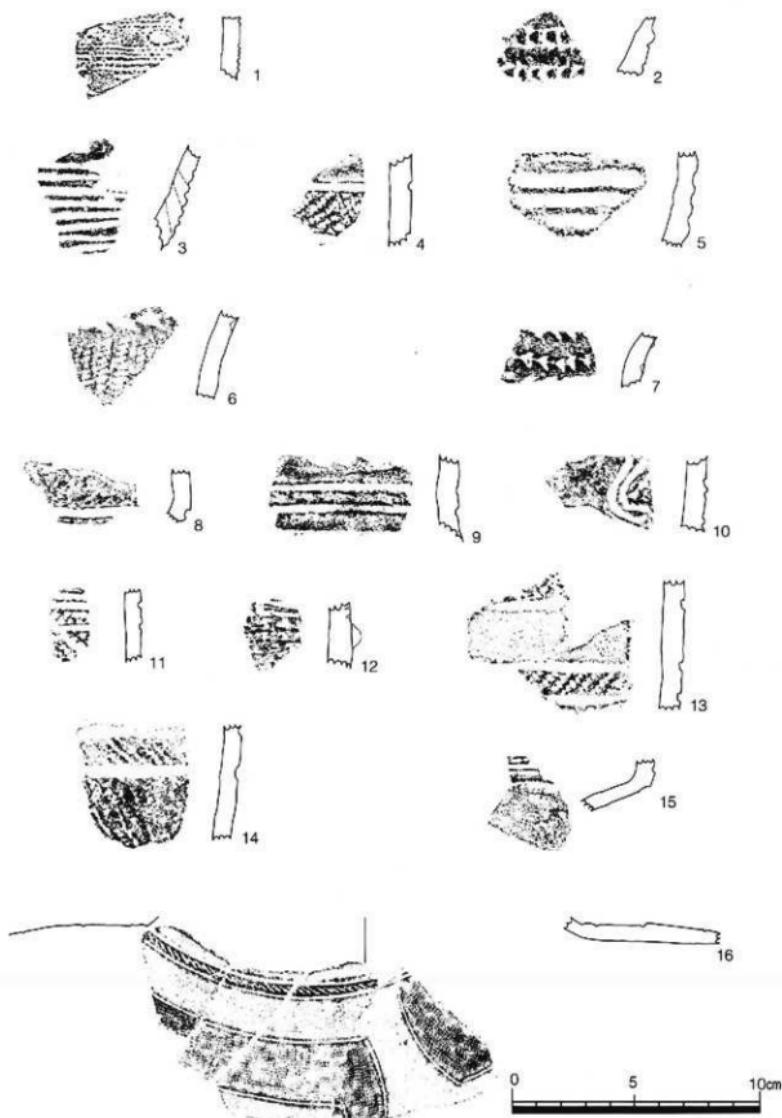
26は、縄文地文の上から、浅い平行沈線文を施す。内外面ともに多量の煤が付着している。

27～31は、縄文のみが施文される粗製深鉢である。29は内外面ともに多量の煤が付着し、その他も表面に煤が付着している。

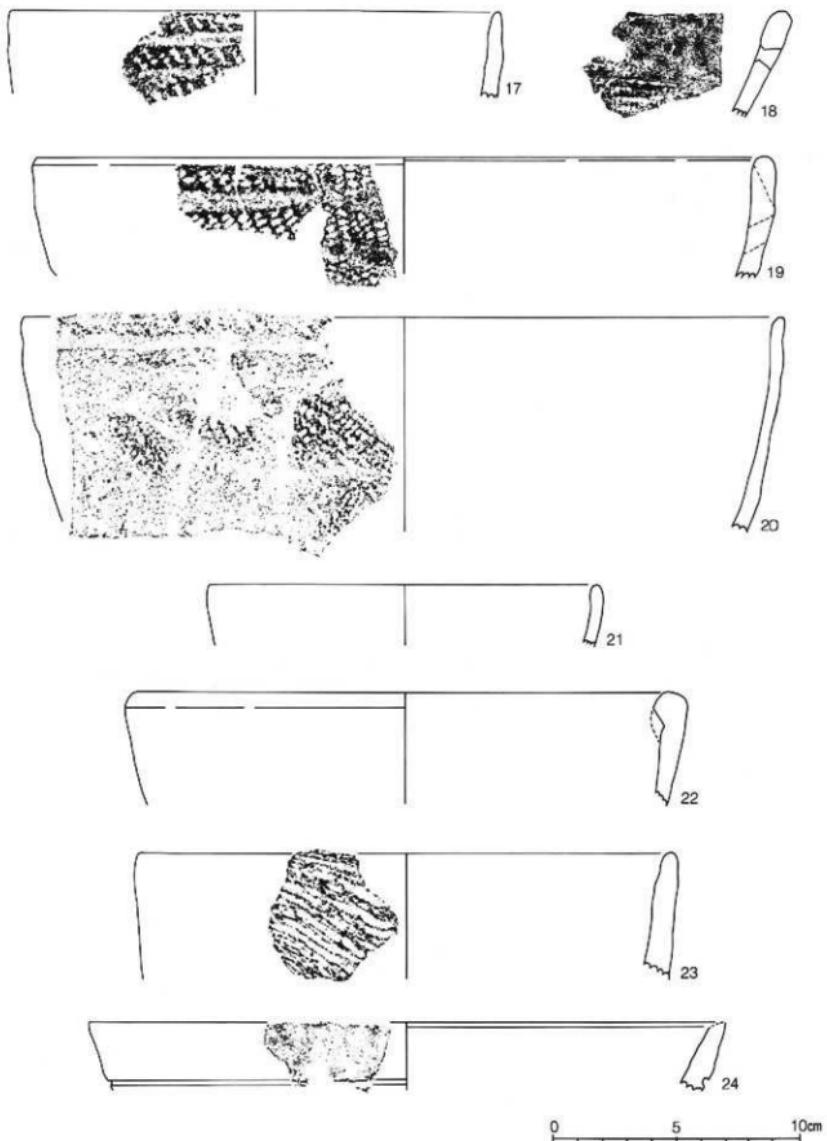
後期後葉～晩期（第7図）

32は直径約25cmの深鉢口縁部で、直線的に外反する器形である。内外面ともに磨きが施され、口唇部には縄文原体による連続押圧が施される。胎土には多量の雲母を含む。

33は、直径約21cmの深鉢口縁部で、外傾する胴部には立する口縁部がつく器形で、屈曲部はすこし肥厚させ縄文原体による連続押圧を施す。口縁部には、沈線をX字状文で区切る文様が施されており、八戸市新保式に比定でき



第4図 遺物実測図 3 穴3、6 カク乱、10 穴12、その他 包含層



第5図 遺物実測図 24 穴3、その他 包含層



第6図 遺物実測図 25~31 包含層

る。内外面ともに良く磨かれているが、表面には多量の煤が付着している。

底部圧痕（第8図）

今回出土した土器底部は、網代圧痕のものだけで、木葉痕のものは見られなかった。

35は最も状態が良好なもので、「2本越え2本潜り1本送り」の型式のものである。その他は小破片のため、網代痕の種類は明確でない。

なお、36・38は内面に炭化物が付着している。

b. 中世の遺物（第9図42）

今回出土した中世の遺物は、片口鉢の底部1片のみである。底部直径は約12cmで、小破片のためオロシ目は見られない。Ⅳ期に属するものであろう。

c. 近世の遺物（第9図43~48）

越中瀬戸（第9図43・44）

43は直径約17cmの壺で、鉄軸が施されている。44は直径約16cmの鉢で、鉄軸が施されている。

瀬戸・美濃（第9図45・47）

碗で、削り出し高台が付き、鉄軸が施されている。

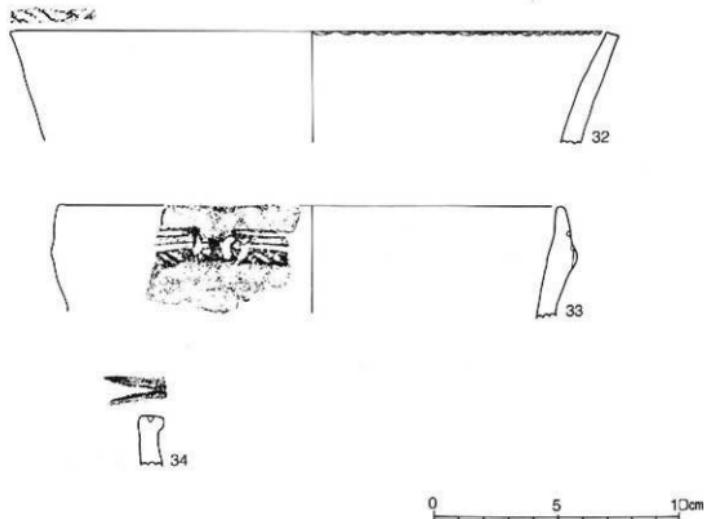
磁器（第9図45・46）

いずれも伊万里系の磁器である。46には内面に重ね焼き痕がある。

(三鍋)

(2) 石 器（第10・11図）

出土した石器は、すべて縄文時代に属するものである。



第7図 遺物実測図 32~34 包含層

打製石斧 (第10図 1 ~ 6)

1は表採品で、平面形で短圓型を呈する。残存長12.2cm、最大幅6.6cm、石材は砂岩で、表面の風化が著しい。刃部を欠損する。

2はX 4・Y 5から出土したもので、平面形は撥型を呈する。残存長9.1cm、最大幅5.7cm、石材は安山岩で、刃部を欠損する。

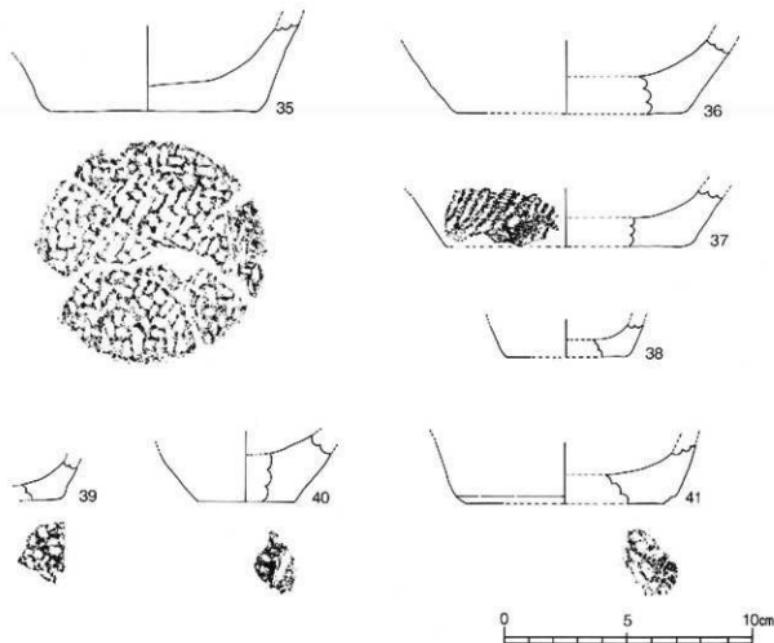
3はX 4・Y 1から出土したもので、平面形は短圓型を呈する。唯一の完形品で、最大長17.2cm、最大幅6.7cm、重量約610g、石材は砂岩である。

4は表採品で、平面形は撥型を呈する。残存長12cm、最大幅8.8cm、石材は砂岩で、刃部を欠損する。

5はX 2・Y 4から出土したものである。撥平面形は短圓型を呈する。唯一の完形品であ、最大長17.2cm、最大幅6.7cm、重量約610g、石材は砂岩である。

6はX 3・Y 2から出土したもので、平面形は撥型を呈する。残存長13.6cm、最大幅7.3cm、石材は砂岩で、刃部を欠損する。

磨製石斧 (第10図 7) 定角式の刃部欠損品で、X 3・Y 4から出土した。残存長7.4cm、最大幅4.7cm、石材は蛇紋岩である。



第8図 遺物実測図 35~41 包含層

叩石 (第11図 8~11)

8は表採品で、残存長7.8cm、最大幅7.7cmを測る。石材は砂岩で、側面と長軸方向端部に使用痕がある。

9はX 6・Y 4の黒褐色土層から出土したもので、最大長14.4cm、最大幅9.7cm、重量約575gを測る。石材は安山岩で、周縁部全体に使用痕がある。

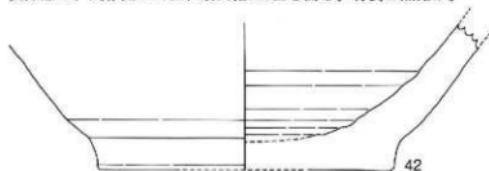
10は表採品で、最大長9.7cm、最大幅9.2cm、重量約925gを測る。石材は安山岩で、球形を呈する。周縁部数箇所に使用痕がある。

11はX 6・Y 4の黒褐色土層から出土したもので、最大長18.2cm、最大幅13.3cm、重量約2kgを測る。石材は安山岩で、周縁部に使用痕がある。

石鍤 (第11図12) X 4・Y 1の黒褐色土層から出土したもので、最大長8.9cm、最大幅6.3cm、重量約184gを測る。石材は安山岩である。

用途不明品 (第11図12) 表採品で、残存長12.4cm、最大幅5.0cmを測る。材質は黒鉛か。

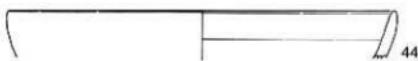
(瀬戸)



42



43



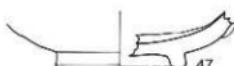
44



45



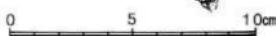
46



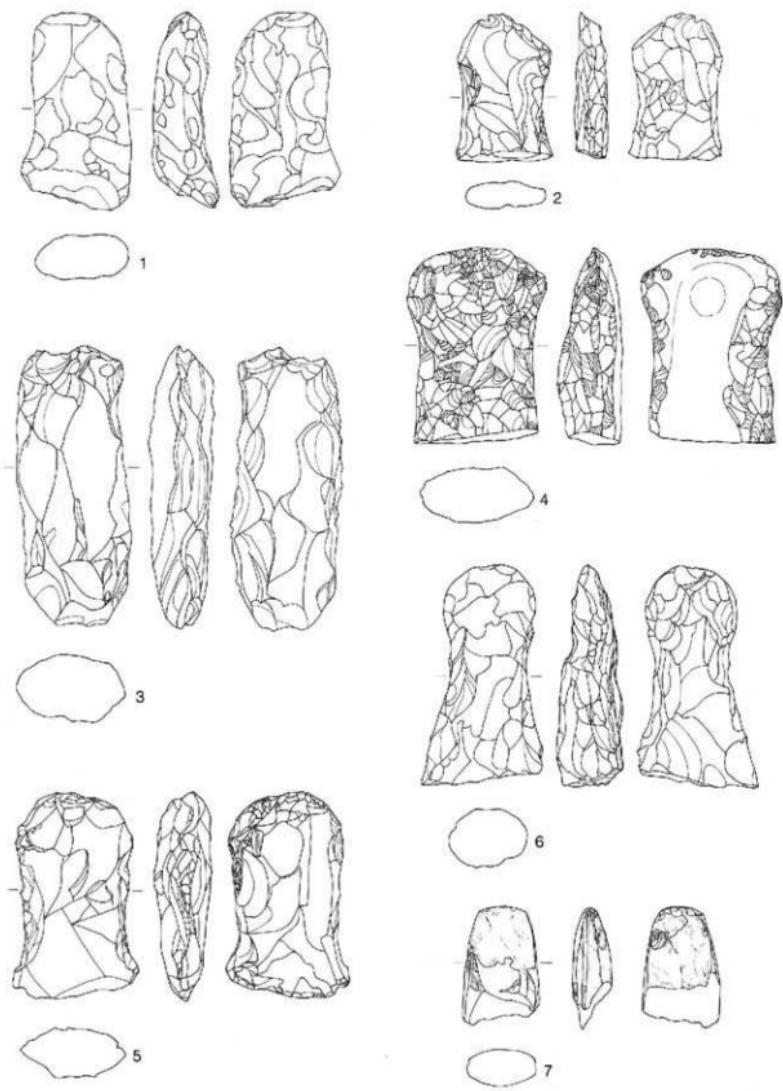
47



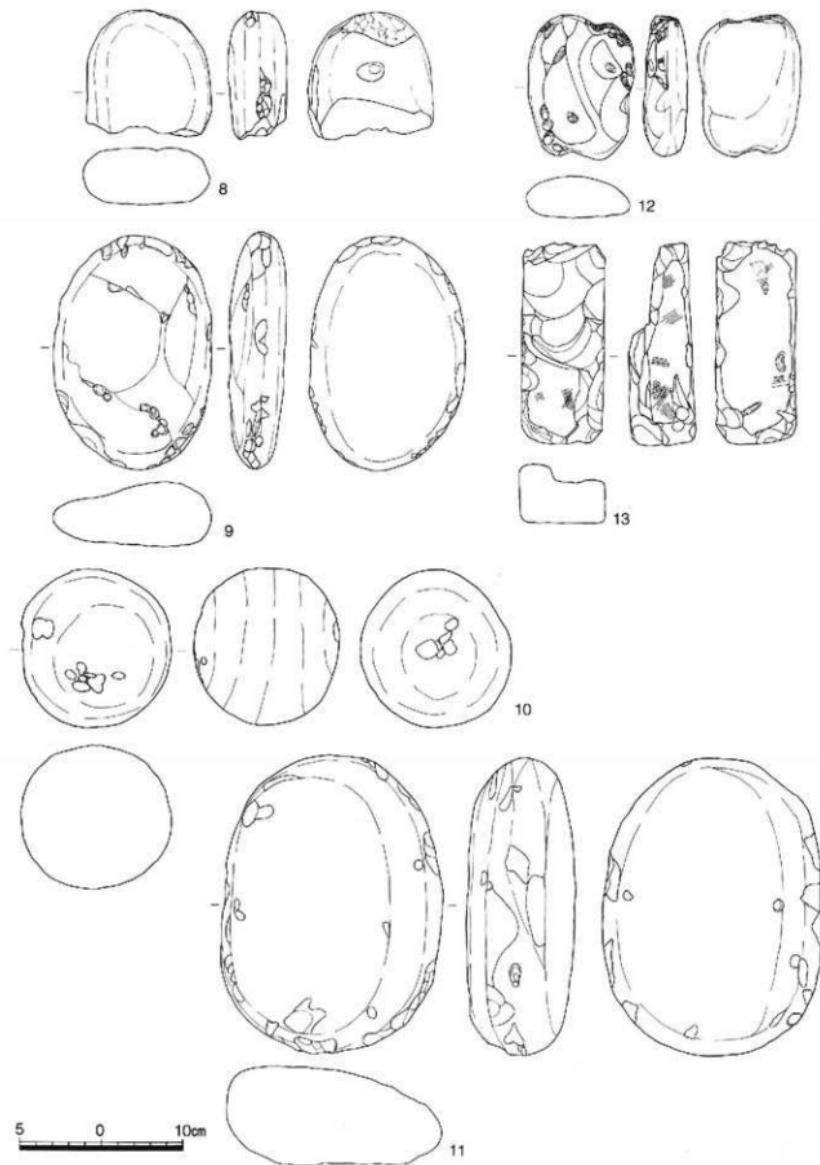
48



第9図 遺物実測図 42~48 包含層



第10図 遺物実測図 1~4 表採、その他 包含層



第11図 遺物実測図 8 10 13 表採 その他 包含層

IV 調査成果

前章までに述べた点と問題点を要約し、まとめとする。

- 古屋敷Ⅳ遺跡は、常願寺川によって形成された河岸段丘上に、古屋敷Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡とともに、遺跡群を形成して存在する。
- 遺跡群の中での位置は古屋敷Ⅰ遺跡の西隣りにあたり、ここは遺跡群を貫流する小支谷の中流で、各遺跡間の交通の要といえる位置にある。
- 造構は、住居跡1棟、穴23個である。
住居跡は擾乱が激しく、遺物も出土していないが、周囲の穴の状況と比較して、後期に属するものと推定する。穴は、遺物の出土したものは5個にすぎない。その分布状況を見ると、X1~5・Y2~5区に集中している。
- 遺物は、ほとんどが包含層からの出土である。

縄文土器は、前期のものが例外的に数点あるが、中心となるのは後期のものである。

中世の遺物は昭和61年に実施した分布調査においても、段丘面全体で珠洲焼の鉢と甕が各1点採取されたにすぎない。今回得られた資料は珠洲焼1点にすぎないが、このことと合わせて考えるなら、当段丘面の開発の時期を考える上で好資料と言えよう。ちなみに、分布満喰においても古代の遺物は発見されていない。

石器は、全て縄文時代に属するものである。打製石斧と叩石の占める割合の多い点が特徴的である。

以上の調査結果から、古屋敷Ⅳ遺跡の性格は次のように考えられる。

遺跡の存続年代は縄文時代前期から後期にかけてであり、遺物出土状況からみて後期に最盛期を迎えるものと考えられる。これは、隣接する古屋敷Ⅰ遺跡が前期～中期を主体とするのに対し興味深い。現在のところ、古屋敷Ⅰ遺跡と古屋敷Ⅳ遺跡は50m程度の距離をおいて別個に存在する遺跡としているが、このような時期のそれを考慮すると、Ⅳ遺跡はⅠ遺跡の中に含まれるものと考える。すなわち、東側の現在古屋敷Ⅰ遺跡としている場所は縄文時代前期から中期にかけての中心地区であり、縄文時代後期になってその中心地区が西側の現在古屋敷Ⅳ遺跡としている場所へと移動したと考えるのが妥当ではなかろうか。

なお、各遺跡の規模等から考えるに、古屋敷遺跡群の中心となっているのは常に古屋敷Ⅰ遺跡であり、それ以外のⅡ・Ⅲ遺跡はそのサテライト的な存在であったと推定できる。

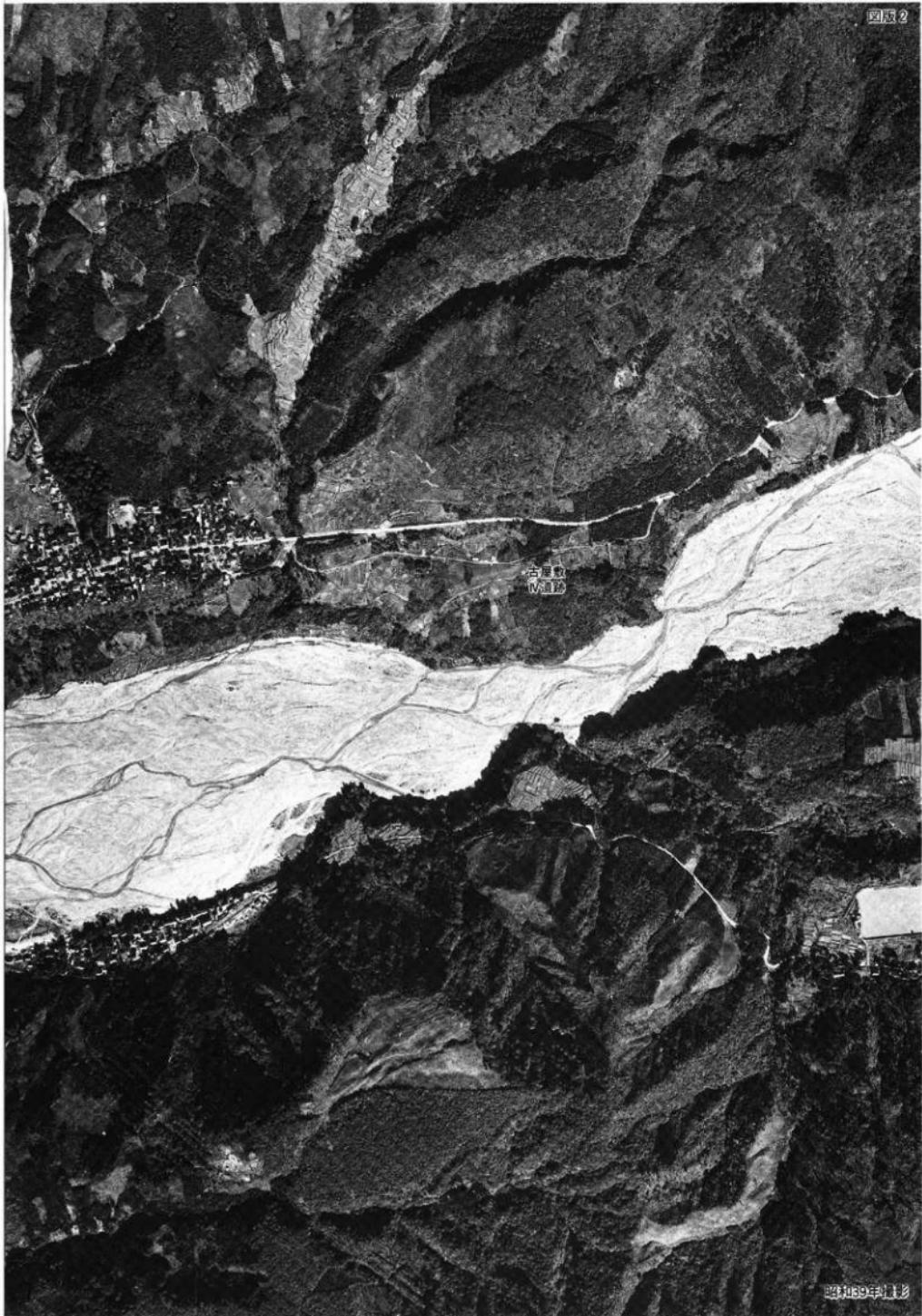
昨年度の調査において、古屋敷Ⅲ遺跡の性格について、遺跡群内における河川漁労のキャンプサイト的存在と推定したが、今年度の調査結果はこれを間接的に補強したといえよう。

(二鍋)

参考文献

- ア 綱谷克彦 1982 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣
- カ 犬野 誠・酒井重洋 1991 「境A遺跡 土器編」『北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編6-1』富山県教育委員会
- コ 小島俊彰 1974 「富山県立山町古峰遺跡第3次発掘調査概要」富山県教育委員会
- 小島俊彰 1986 「朝日下層式期」「真脇遺跡」能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団
- サ 酒井重洋・神保孝造・奥村吉信 1981 「Ⅲ 古峰遺跡」「富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概要 白岩養父ノ上遺跡・吉峰遺跡」立山町教育委員会
- ス 鈴木道之助 1981 「図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文」柏書房
- 鈴木道之助 1991 「図録 石器入門辞典 縄文」柏書房
- 珠洲焼資料館 1989 「珠洲の名陶」珠洲市立珠洲焼資料館
- タ 立山町教育委員会 1985 「富山県立山町総合公園内野沢狐帽遺跡発掘調査概要」
- 立山町教育委員会 1986 「立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ」
- 立山町教育委員会 1989 「吉峰遺跡—第6次発掘調査概要ー」
- 立山町教育委員会 1990 「吉峰遺跡—第7次発掘調査概要ー」
- 立山町教育委員会 1993 「古屋敷Ⅲ遺跡—発掘調査報告ー」
- ハ 橋本 正 1970 「立山町古峰遺跡発掘調査報告書」富山県教育委員会
- 橋本 正 1972 「第Ⅱ部 立山町古峰遺跡」「富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」富山県教育委員会
- 橋本 正 1972 「三、縄文早・前期」「富山県史」考古編
- ヒ 久田正弘 1986 「井口Ⅱ式期・井口Ⅲ式期・八日市新保式期」「真脇遺跡」能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団
- ミ 渡 辰 1972 「三、縄文後・晚期」「富山県史」考古編
- モ 森 秀典・山崎典子・川端幸江 1991 「立山町芦所寺不動半遺跡」「大境 第13号」
- ヤ 安田良栄 1977 「郷土のあけぼの」「立山町史」上巻
- 柳井 誠・神保孝造 1975 「富山県立山町古峰遺跡第4次発掘調査概要」富山県教育委員会
- 山本正敏 1990 「Ⅱ 石器各説」「北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編5-1 境A遺跡 石器編」富山県教育委員会
- 山本正敏・林 浩明 1990 「安居五百歩遺跡」福野町教育委員会
- ミ 米田義光 1986 「酒見式・井口Ⅰ式期」「真脇遺跡」能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団





古屋敷
IV道路

図版 3

調査区全景
(北東から)



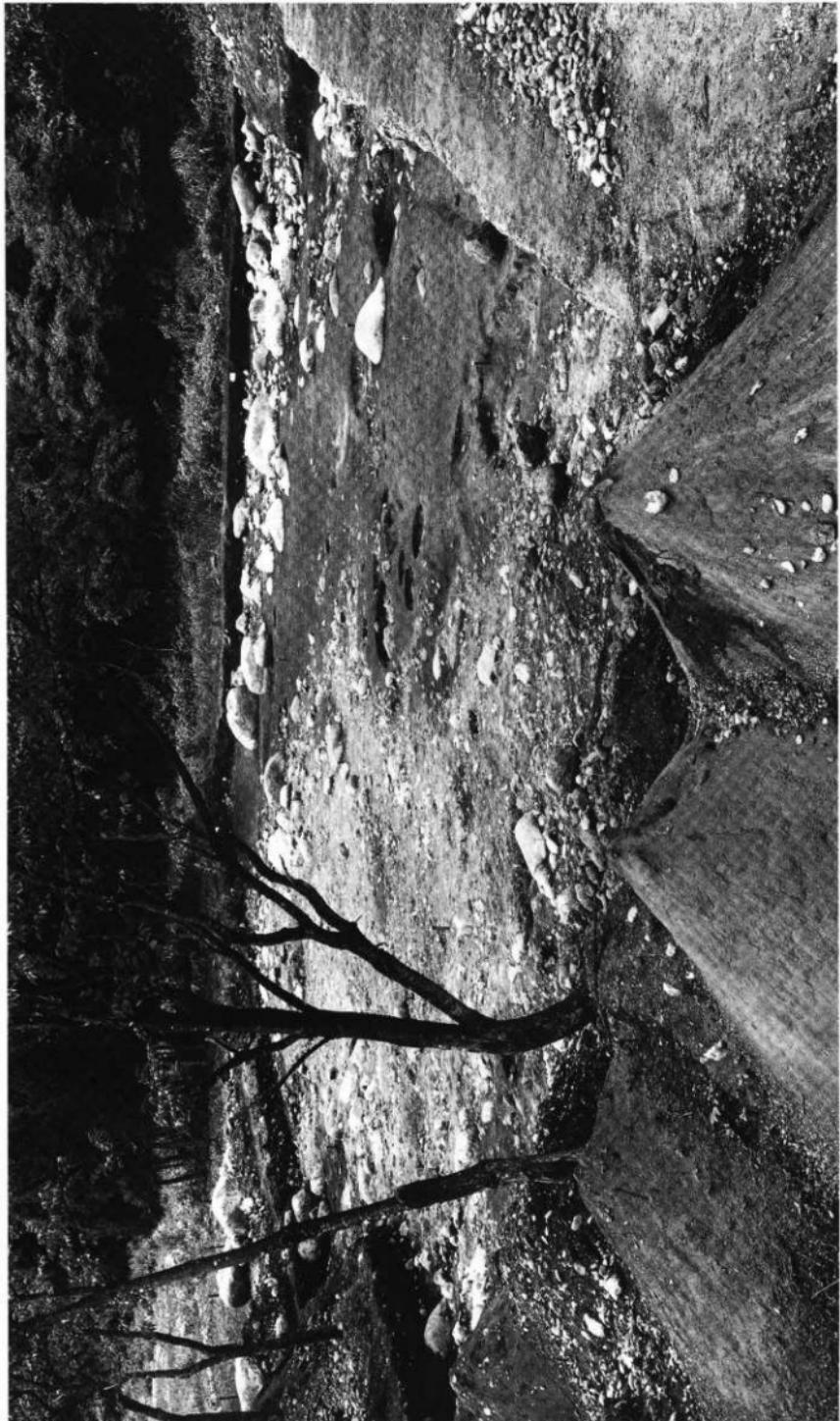
図版 4

調査区全景
(東から)



図版 5

調査区全景
(南東から)



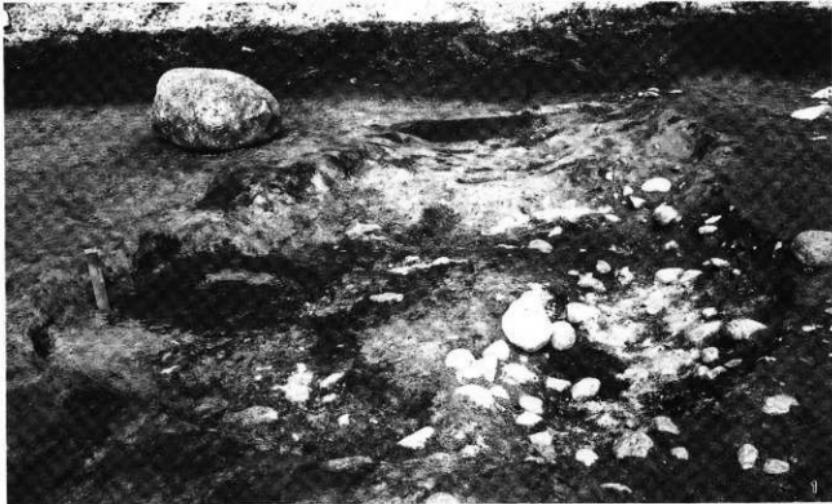
図版 6

調査区全景
(南から)



図版 7

1. 住居跡
(西から)



2. 住居址
(北から)



3. 穴12
(北から)

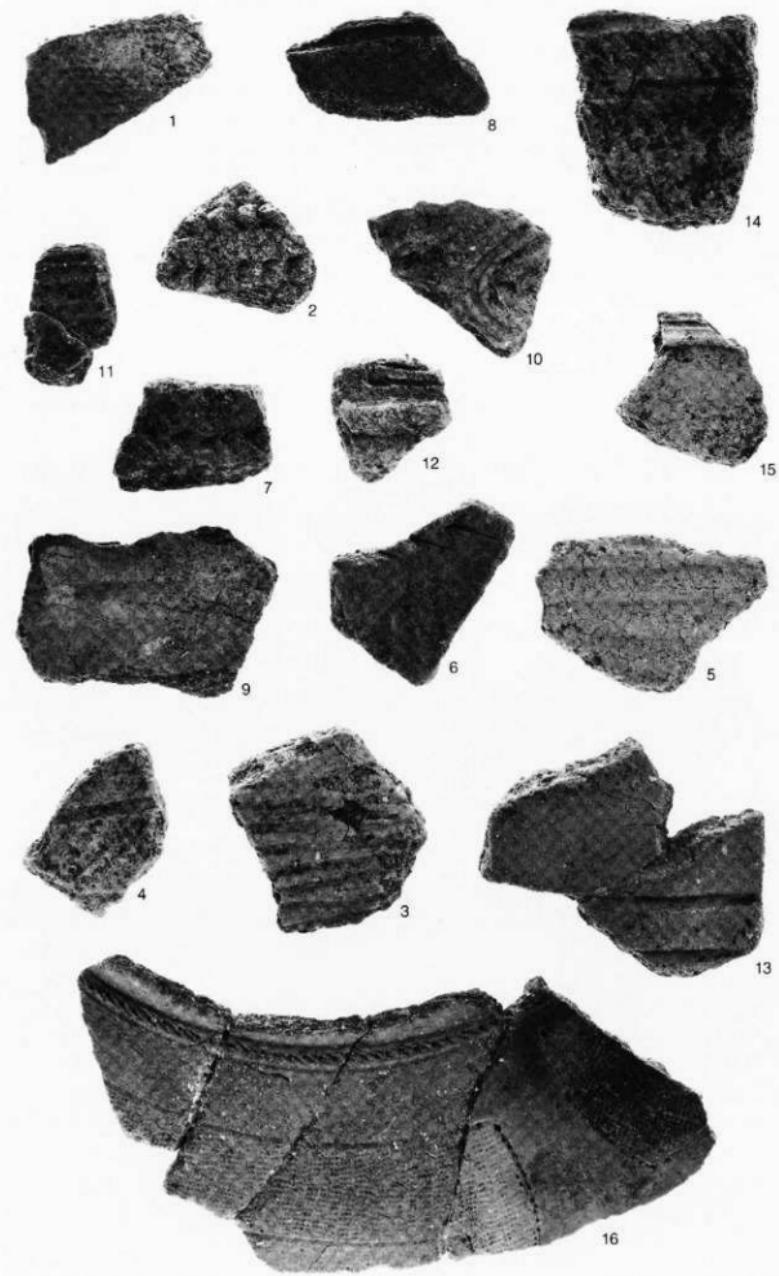


4. 穴12
(東から)



図版 8

3. 穴3
10. 穴12
その他、包含層



図版 9

24. 穴 3

その他。包含層



19



19



22



18



24



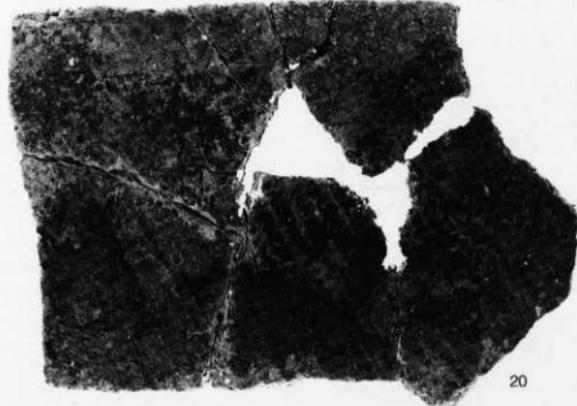
21



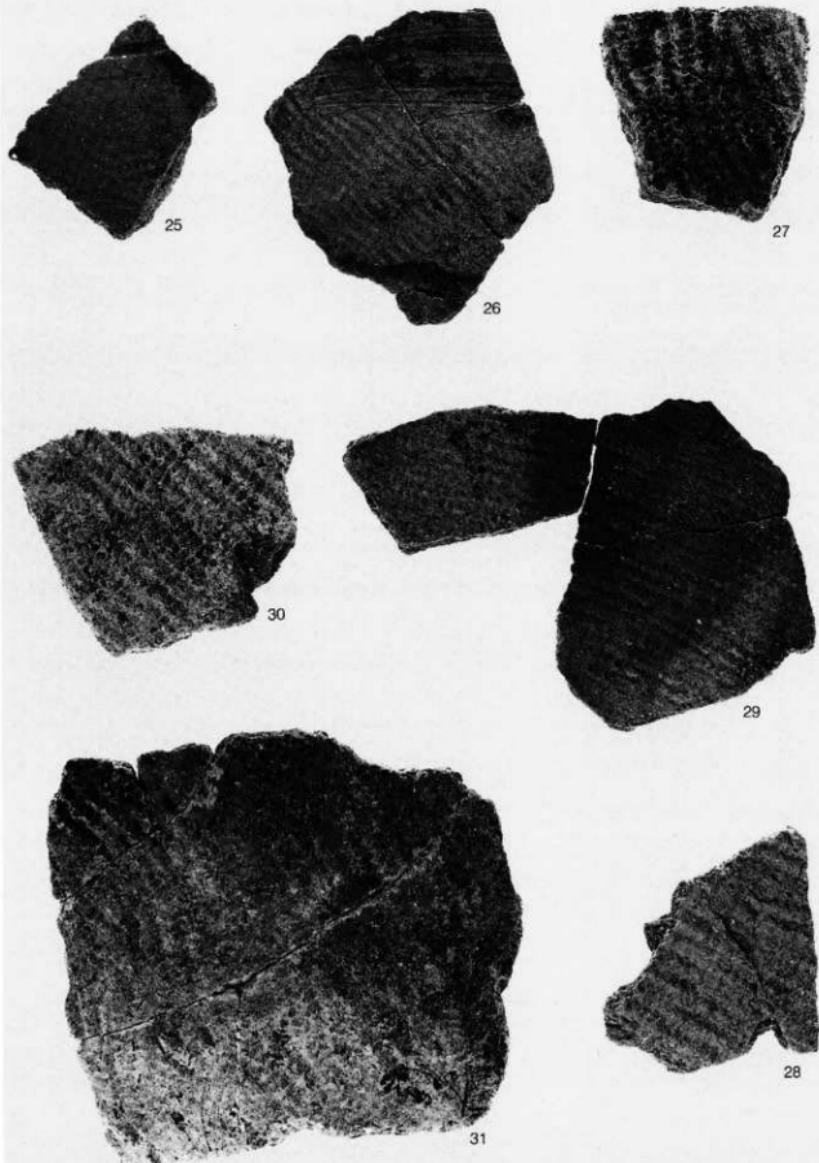
17



23



20





34



32



33



37



41



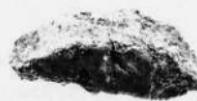
36



40



35



38



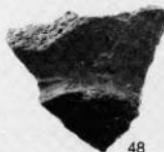
39



42



44



48



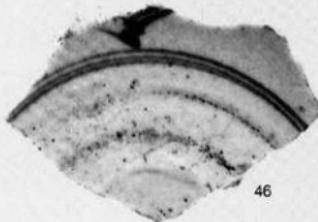
43



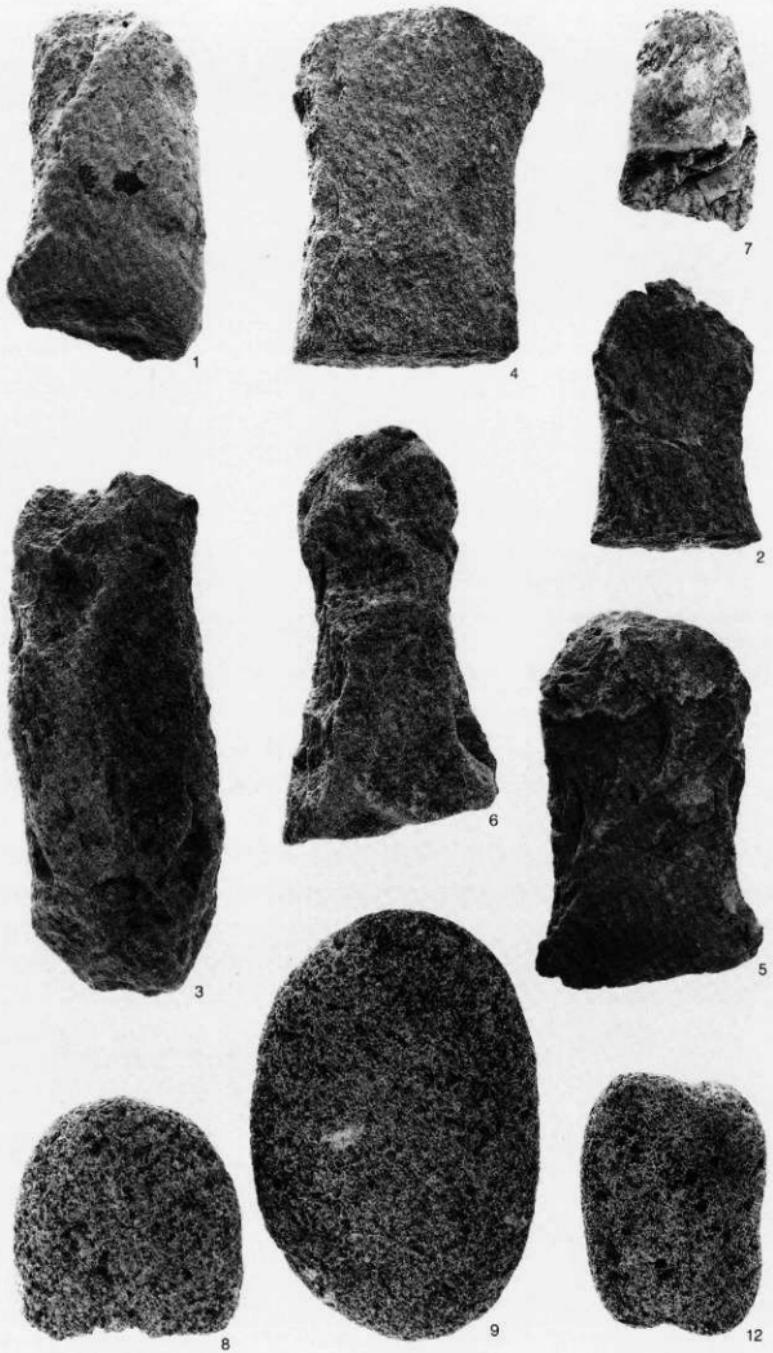
45



47



46



古屋敷 IV 遺跡

—発掘調査報告—

立山町文化財調査報告書第20冊

発行日 平成 6年 3月31日

編集 立山町教育委員会

発行 立山町教育委員会

印刷 株式会社 チューエツ

